雑木林をつくる

人の手と自然の対話・里山作業入門

倉本宣・内城道興編著 / 定価1442円
発行＝百水社　発売＝星雲社

この本は雑木林と仲良くなりたいと思っている人に最適の入門書である。

前半は 多摩ニュータウン（東京都多摩市）の雑木林と関わってきた人たちの姿がドキュメント的に語られている。雑木林を自分達の手で手入れしようとスタートし、悪戦苦闘しながらも雑木林でどんな風に楽しんできたかが生き生きと書かれている。

後半は「雑木林とのつきあい－21のキーワード」の章で「地形図から雑木林を探すには？」「健全な雑木林とは？」「雑木林の地主さんとのつきあい方は？」等、雑木林とつきあう上での様々なポイントを分かり易くまとめている。さらに雑木林の生き物についても植物、小鳥、土壌動物まで簡単な図鑑的な記載がある。

私が興味深かったのは雑木林の手入れを始めた当初、笹を刈るにしても非常に苦労しながらも「守らなければ、という肩ひじ張ったものでなく、われわれの庭、われわれの林を作る遊びをしよう」という考え方で会を進めていったという点である。かつて炭焼きという生産のために管理していた雑木林は過去のものであって、現在は現在を生きる私たちが新しい雑木林との関わり方、楽しみ方を見付けるときである。遊び、楽しみであるからこそ長続きするし、今までと違った新しい視点で雑木林を見つめることも出来ると思う。そういう点では「雑木林を管理する」という言い方も適当でない気がする。著者の言葉どおり、管理をしているのではなく「雑木林を作る遊びをしている」のではないだろうか。

巻末には全国の雑木林の再生・保全グループの一覧も載せられており、ひとりではなかなか出来ないが何かしたい人が、一歩踏み出す手助けとなるであろう。

また、この本は関東での実践をもとに書かれており、その他の地域では雑木林に 生育、生息する種も異なり、また雑木林の管理の仕方も異なる。この本に述べられていることは、大筋では全国どこでも通じるが細かい所であてはまらない点もある。私が関西に住んでいるので特に感じるのかもしれないが、その旨一言欲しいと思った。

今、雑木林は新緑の淡く光る緑が日々濃い緑へと変化していく一年で私が一番好きな季節である。雑木林が大好きな私は、この本を読んで雑木林と遊べる人が増えることを願っている。

（大阪支社自然環境調査室・石山麻子）

本文中イラストより

◆著者紹介◆

●倉本宣 （くらもと　のぼる） 1955年東京都生まれ。東京都庁勤務中、 公園管理と自然保護の仕事に関わる。 現在は明治大学農学部専任講師。 著書 『緑の景観と植生管理』 （共著、ソフトサイエンス社）、 『緑地生態学』 （朝倉書店） 『雑木林の植生管理』 （ソフトサイエンス社）

●内城道興 （うちじょう　みちおき） 1940年岩手県生まれ。 会社員。 著書 『翔べ、 オオムラサキ』 （共著、講談社 『多摩市の野草』 『多摩市の樹木』 （編著、 多摩市） 自著、 句集 『次男坊』

「日本海重油回収ボランティア」に参加して

今年１月、日本海沿岸でおきた重油流出事故のニュースを聞いたとき、最初は他人ごとというか、よくあるニュースのひとつくらいにしか感じていませんでした。しかし１月中旬に偶然、タンカーの船首部分が漂着した福井県三国町での重油回収ボランティアに参加する機会があり、ほとんど興味本位で参加しました。しかし、実際現場に行き、重油に汚染された海を目の前にすると見学気分は吹き飛び、一刻も早くあの海を何とかしたいという衝動に変わりました。

現場に着いてまず驚いたのは、海の香りが全くせずに重油の匂いだけが充満していたことです。見た目はきれいな日本海を前にしながら重油の匂いしかしない、これは異様な光景で、とても違和感があると同時に衝撃を受けました。次に驚いたのは、海岸への重油の漂着の仕方です。現場は主に岩場でしたが、そこにある岩や小石すべてに重油がべっとりと付き、小石の間やその下にまで入り込んでいました。簡単に重油が回収できるとは思っていませんでしたが、漂着してしまった重油があれほどひどいとは思いませんでした。これを見た瞬間、私は人間による海岸の重油回収が事実上不可能なことを悟りました。表面の重油は回収できても、小石の隙間に入り込んでしまったものまでは回収できません。

初日は天候が悪く、海に入っての回収はできませんでしたが、ボランティア本部への物資の搬入や整理を主にしました。

２日目は、三国町より東の砂浜で地元の自然保護団体の方々と共に、被害を受けた水鳥の保護と死体の回収を行いました。砂浜は、昨日の岩場と比べて重油の漂着は少量でしたが、どこまでいってもやはりその匂いが充満しており、生物の気配が全くしない不気味な「沈黙の海」となってしまっていました。それは、まるで未来の海を見ているかの様な気分でした。その日の午前中は、保護を必要としたり、死んでしまった水鳥を見つけることはありませんでした。午後になって、漁港の防波堤上で重油にまみれた水鳥を発見しました。その水鳥は防波堤の一番高い所で羽を大きく開き、重油を乾かそうとしていました。何度も羽をふり、また羽を広げるということを繰り返す姿が痛々しく憐れでした。ボートで近づいて保護しようとしましたが、あと少しという所でその水鳥は飛び立ち逃げていってしまいました。10人近い人間がいながら水鳥１匹保護できないという無力感を、あの場にいた全員が味わったと思います。結局、水鳥の保護は、その鳥が動けなくなるほど衰弱するまで待つしかない様でした。

港の手前側では、道路に自動車が走り、家が建ち並んでいます。しかし、それらの文明の利器は、水鳥の保護や重油回収という作業には何の役にも立たない事を歯がゆく感じました。同時に私たちの文明の方向性は実は著しく偏っているのではないかという疑問も生じてきました。

その日別の場所で回収された、重油にまみれた水鳥の死体は、あまりにも無残でした。

（本社アルバイト・角間裕）

油汚染と海鳥

ウミスズメ科 ウトウ *Cerorhinca monocerata*
（京都府丹後半島琴引浜 /1997.01.19 撮影）

保護、 または死体として運ばれた鳥は１３０７羽 （３月１７日環境庁発表）。 生きて介護を受けたものはごくわずかで、 大半は海上で息絶え岸に打ち上げられた。 海中に沈むなどして失われた数を含めれば、 実際の被害数はこの１０～２０倍にもなるという。

死体は、 各県から東京港に送られてくる。 ごく軽度なものから、 ひと抱えもある重油塊と化した重度のものまで状態はいろいろだ。 油汚染が、 海鳥に与える影響ははかりしれない。 体機能低下による餓死。 食物連鎖起源の中毒。 餌動物の減少による繁殖率低下。 汚染個体の抱卵による卵や雛の死亡。 つがい相手の死亡など、 海鳥の苦難は今後何年も続くのである。

もう、 新聞紙面でナホトカの記事を見かけることもほとんどなくなった。 鳥のリハビリセンターも解散した。 けれど、 海鳥たちは、 汚染された海でこれから繁殖のシーズンを迎えようとしている。 失われた命を無駄にしないために、 同じ事を繰り返さないために、 私たちは、 人間以外の生き物といつも環境を共有しているということを、 この事故を通して再認識したい。

（日本ウミスズメ類研究会 ・ 佐藤美穂子）

佐藤美穂子 ： ９６年春まで本社調査室に勤務。 海鳥の生態に関心を持ち、 日本ウミスズメ類研究会に入会。 海鳥調査を本業とするために退社。 今回の事故では、 被害推定調査を実施しており、 現在も継続中である。

「ナホトカ号重油流出事故」 （平成９年３月17日・「環境庁発表」より）

今年の１月２日に島根県隠岐島沖で、ロシア船籍のタンカー・ナホトカ号が沈没。その後、船首部分が漂流を始め、７日に福井県三国町に座礁。船内に残っていた重油が周辺府県の海岸に漂着し、付近の生物相や地元の産業に大きな被害を与えた。

事故から３ヶ月経過した現在も、油除去作業、調査等を継続して実施している。

環境庁等のインターネットのホームページで、関連情報を見ることができます。……環境庁・アドレス http://www.eic.or.jp